

1. 背景と調査の設計

これまでの山田礼子先生を代表とする科研費での国際学生調査による各国比較では、「日本人学生のグローバル・コンピテンシーの習得状況についての自己評価の低さ」が示されてきた。他方で、日本の若者の自己評価が低いことは、大学生調査に限らず、多くの国際比較調査において共通している傾向である。

そこで、2024年度調査を行うにあたり、①国際比較調査の結果を単純に比較するのではなく、回答特性を考慮することが必要ではないか。その背景として、日本人学生の自己評価が実際はどれくらい他国と比べて低くなっているのかの検証が必要ではないか、②日本人学生・他国の学生という国別の分析とは異なる分析枠組みも検討が必要ではないか、という2つの問いを設定した。具体的には、2024年調査において、国別の分析とは異なる影響として個人特性を検討するために、内閣府「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」を参考とした自己認識や意識を尋ねる設問（18項目）、個々人のパーソナリティ特性を把握するための心理学における「ビッグファイブ理論」に基づく尺度項目(TIPI)（各国版の翻訳項目）を取り入れた。

2. 2024年調査による平均値からみた国際比較

2024年調査による日本・アメリカ・韓国・台湾・オーストラリアの5か国・地域の学生に対する、①教育経験（初等中等教育段階）・13項目、②教育経験（大学段階）・13項目、③大学での経験・22項目、④授業を通じた知識・能力等の習得状況・23項目、⑤異なる国や文化への関心・13項目、⑥個人特性や意識を直接尋ねる設問・18項目、⑦「ビッグファイブ理論」による尺度項目・10項目の回答結果について、各項目の平均値を国別に比較した。①②③は、事実を問う質問、④⑤は意識を問う質問、⑥⑦は個人特性に関する設問である。

報告時にはすべての項目を紹介したが、本概要では、一例として、④授業を通じた知識・能力等の習得状況についての結果を例示する。数値は平均値、A/B/C/Dは多重比較で示される等質サブグループのカテゴリであり、Aが平均値が低いグループである。

結果例) ④授業を通じた知識・能力等の習得状況

4段階の選択肢 (4が肯定)	日本		台湾		韓国		オーストラリア		アメリカ	
q12_1 /異文化の環境でも生き抜くことができる	2.17	A	3.22	C	2.93	B	3.22	C	3.41	D
q12_2 /異文化に対して寛容な態度で接することができる	2.58	A	3.37	C	3.11	B	3.28	C	3.34	C
q12_3 /異なる文化背景を持つ人と協働できる	2.53	A	3.23	C	3.08	B	3.35	C,D	3.41	D
q12_4 /異なる文化背景を持つ友人をつくる	2.29	A	3.22	C	2.90	B	3.32	C	3.27	C
q12_5 /未知なことや新しいことに対して挑戦する意欲がある	2.50	A	3.16	C	2.94	B	3.23	C	3.20	C
q12_6 /異なる文化背景を持つ人と組んで目標を達成する	2.31	A	3.13	C	2.92	B	3.28	C,D	3.35	D
q12_7 /海外のことでも積極的に関わることができる	2.28	A	2.90	C	2.70	B	3.11	D	3.23	D
q12_8 /異なる文化背景の人とコミュニケーションをとれる	2.31	A	3.09	B,C	2.95	B	3.23	C,D	3.29	D
q12_9 /世界に対する広い視野を持つ (グローバルな関心)	2.42	A	3.11	B	2.99	B	3.28	C	3.30	C
q12_10 /グローバル規模での持続可能な開発目標 (SDGs) に関連した話題に関心がある	2.33	A	3.05	C	2.82	B	2.95	B,C	3.10	C
q12_11 /複数の言語でプレゼンテーションできる	1.91	A	2.89	C	2.47	B	2.39	B	2.74	C
q12_12 /既存の事例や研究から新たな視点や考えを生み出す	2.32	A	3.19	C,D	2.89	B	3.15	C	3.31	D
q12_13 /新しい分野や領域の考え方に対してオープンである	2.49	A	3.22	C	3.03	B	3.26	C	3.36	C
q12_14 /新しい分野や領域の考え方を取り入れてイノベーションに挑戦する	2.31	A	3.22	C	2.85	B	3.16	C	3.30	C
q12_15 /対立する意見や立場が異なる状況を自ら動いて克服する	2.39	A	3.21	C	2.96	B	3.25	C	3.28	C
q12_16 /自身で考え判断し、信念を持って自分のできる範囲の行動を行う	2.56	A	3.25	C	3.07	B	3.35	C	3.31	C
q12_17 /専攻する専門分野の知識がある	2.62	A	3.26	C	3.06	B	3.07	B	3.24	C
q12_18 /専攻する専門分野の知識を応用することができる	2.48	A	3.24	C	2.99	B	3.10	B,C	3.22	C
q12_19 /人文学分野 (哲学、歴史、文学、心理学、芸術等) の知識がある	2.40	A	2.95	B	2.85	B	2.86	B	3.18	C
q12_20 /社会科学分野 (政治、政策、法律、経済、経営、社会科学等) の知識がある	2.41	A	2.89	B	2.75	B	2.74	B	3.10	C
q12_21 /理工農生系分野 (理学、生命科学、農学、工学、医学等) の知識がある	2.15	A	2.76	B	2.67	B	2.85	B	3.07	C
q12_22 /情報科学分野 (コンピューターサイエンス、データサイエンス、AI等) の知識がある	2.19	A	2.87	C,D	2.77	B,C	2.67	B	2.95	D
q12_23 /母語以外の言語を運用することができる	2.07	A	2.93	D	2.74	C	2.46	B	2.73	C

2024年国際比較調査から、この①から⑦までのすべての設問項目について結果をみると、教育経験・能力の習得状況・異なる文化への関心・自分の状況や意欲、個人特性のすべてについて、平均でみると日本の学生の平均値は、他の4カ国・地域と比べ、低い結果であった。全体傾向として、日本とアメリカの結果が対極にあり（日本が低く、アメリカが高い）、韓国は日本に寄り、台湾・オーストラリアがアメリカに寄る傾向がみられた。事実に関する設問でも、意識に関する設問でも、個人特性でも結果が低く出ることについて、日本の学生には、極端を回避する、肯定的に回答しない、控えめに回答する傾向があることを示唆するものである。他方で、アメリカの学生は肯定的に回答しがちであるといえる。このような回答特性は、国際比較調査において、データの解釈に留意が必要であることを示唆している。

3. 個人特性の影響に対する探索的な分析

個人特性の影響を明らかにするために、重回帰分析による探索的分析を行ったところ、能力の自己評価（意識）に対して、大学での教育経験（事実）だけでなく、個人特性・パーソナリティ特性も影響している可能性が高いことが示された。このことは、大学での教育経験に一定の効果があることを示唆するものでもある。

しかし、個人特性と教育経験、能力評価の関係は、個人特性によって教育経験・能力評価が変わることが考えられる一方で、教育経験によって個人特性・能力評価が変わることも考えられる。本報告では、教育経験と個人特性をどのように組み合わせて分析していくかは今後、さらなる検討が必要であり、今後の検討課題であることを指摘した。

以上